

アウトドア プログラム
リスクマネジメント・マニュアル

2010年01月

(株)イー・ケア・サポート

キャンプ・合宿活動などのリスクマネジメント・マニュアル

「慣れ」は最大の敵です。「今回が初めて」の緊張感を持って、万全の対策づくりに注力します。

1. 事前予防対策

(1) 活動・プログラムの計画

計画の骨格<5W2H>を決定する。(いつ、どこで、誰が/どの年齢層を対象に、何を、どのように、いくらで、何を目玉として実施するか)

「ひやり・はっと、リスク想定打ち合せ会を開催して、当該プログラムのリスクを洗い出し対策を検討する。

当該(決定)テーマについて、団体内にノウハウがあるか確認。十分でない場合は、計画の中止、変更または外部専門家への協力要請を検討する。

外部協力者に要請する場合には、直接会うなどして「質」を確かめる。

適正な対象人数と安全管理に必要なスタッフの数を確定する。

- リーダー、サブリーダー(複数)、組織図/指揮系統を決定する。
- 予定をオーバーした申込がある場合は、協力者もそれに応じて増やす。
- 協力スタッフが増やせない場合は、参加申込を締め切る。(断る勇気も必要)
- 協力スタッフの経験・ノウハウを確認する。

足りない場合には、実地調査同行、事前研修等によりスキルアップをスケジュール化する。実施までのスケジュールを立てる。

「計画骨格策定」「目的確認・想定リスクの確認」「事前実地調査」「計画の見直し・留意点の明確化」「協力者募集」「参加案内作成・配布」「参加者募集」「事前説明会の実施」「説明会時の意見を検討して必要なら計画の変更や修正」「当日に向けての準備」「プログラムの実施」「反省会(総括・反省点など)」

持ち物のリストアップ(団体が用意すべきもの、参加者各自が用意すべきもの)

(2) 事前実地調査(下見)

可能な限り多くのスタッフ・協力者で下見をする。

- 調査の視点は、往復の経路(交通手段等)、現地への経路(危険なところなど)、現地の状況(特に危険なところ)、緊急時の医療機関・距離・連絡方法、緊急時の避難場所・避難ルート、現地での遊びやプログラム実施上の留意点などのチェック

下見の結果により、「中止」「変更」「修正」「予定通りの実施」、また「注意すべき点や場所」を計画に反映させる。

(*『実地調査シート』参照)

(3)協力者への事前説明、指導

下見や過去のひやり・はっと、あるいは想定される危険を認識してもらう。

指揮・指示系統と各自の役割を指示し確認する。

参加者から見た場合には「引率のプロ」として見られること / 求められる『問題意識』を伝授する。無償であっても「プロフェッショナル」であることの認識が大切。

団体としての賠償責任補償体制を説明

(保険で協力者の賠償責任及び協力者のケガを一定補償していること)

必要な所持品、分担して購入する物品、運ぶ物品などの説明

(4)参加者(参加希望者)への説明会の開催

キャンプ・プログラムの意義と目的を説明する。(参加者の範囲/対象者は事前に告知)

プログラムの概略を説明する。

- 目的地
- スケジュール
- 往復経路と交通手段
- 必要な携行品

多少とも危険な場所や活動については、そのリスクと対策を説明する。

直前(特に数日前から)の健康管理のお願い

- 熱を測っておいてもらう
- 睡眠や便の調子についても観察しておいてもらう。

団体としての責任ある引率体制、補償制度について説明する。

- ケガなどについて、団体に責のあるケースと、子ども自身の自己責任によるケースを説明し、理解を求める。

ex.はしゃいで転んでケガした、鬼ごっこやかくれんぼでケガした、ボール遊びでケガしたなどは、自己責任によります。

- 団体の会員には一定の傷害保険が付いていることを説明。

(会員でない人には傷害補償はないので自分で備えてもらう。団体 / 引率側に責任のある場合はその過失割合に応じて賠償責任保険 / 補償制度が適用される。)

*参加決定者には、天候等による中止・延期ルール、連絡網の伝達をする。

(5)事前準備(事務局)

○スケジュールの再確認

○プログラムに必要な物品の取り揃え、現地借用物の確認

ex. レクリエーション活動に必要なもの、自炊に必要なもの等
テント、ランプ、etc.

○救急体制の確認

ー救急箱(袋)の用意、内容物の確認、補充

消毒液、ガーゼ、キズバン、脱脂綿、包帯、三角巾、はさみ、体温計、(血圧計)
痛み止め、整腸剤、下痢止め、目薬、塗り薬(オロナインのようなもの)、虫よけスプレー、虫刺され軟膏、

- * 救急処置、救急法などの手順が記してあるもののコピー
- 携帯用簡易トイレなども有効(100円ショップのようなところで売っているものもある)
- スタッフの欠席等による補充、交渉、個別説明などの実施

2. 当日集合時

- 天候判断(経路と現地)による催行可否を決定する。
 - 中止連絡網を回しても、集合場所には誰かが行っているようにする。
- 出発までに余裕を持った集合時間(特にスタッフは早く集合して、重要ポイントのおさらい)
- 円滑な出欠確認と未到着者への連絡(手分けをして)
- 健康管理表(事前に配布している場合)の回収
 - 気になる参加者が居たら、総合的に判断する(辞退してもらう、要注意としてスタッフに徹底する、定期的に体調チェックをする など)
 - 早めに(数日前から)分かっている場合は、辞退してもらう、あるいは保護者同伴を条件に参加してもらう。
- 出発後の出欠確認ルールの徹底(チーム制による相互確認/迷子や置いてきぼりを出さない)
- 危険箇所の事前説明
- 休憩のタイミングと場所の伝達

3. 出発後(プログラムの実施)

- 十分な休憩と余裕を持ったスケジュール進行
- 定期的に参加者の人数確認をする。(チーム制による相手チェックルールの励行)
 - 同時に体調の変化の申告及び担当リーダーが(その班の)体調を確認する。
 - 少しでも変化を感じたら熱や血圧を測るなどチェックを行い、同行者が付き添って戻る。
 - 近隣の医療機関にかかる等の判断を行い実行する
- 事前に調査した危険な場所での注意指示と見守り
- 狭い道を歩く場合の一直列または二列縦隊の指示と励行
 - 先頭・中ほど・最後尾にスタッフが位置して、迷子の防止や危険行為を抑止する。

* 緊急的事態

- 基本的には、事前に看護師さんなどの医療従事者に同行をお願いする。
(判断・処置等を適切に仰ぐことができる。ただし催行条件ではない。)
- 具合が悪い、ケガをした時の対応は、「救急箱による対応」「応急処置をするが経過観察して継続する」「応急処置・経過観察で続けるが、帰ったら必ず医師に見てもらう」「付き添って医療機関に連れて行く」「救急車(隊)に連絡する」というように段階がある。
 - ポイントは『迷ったら重い方に判断する』ことが大切。子どもに聞いても、余程でない限り「子どもは大丈夫と応えるもの」とははじめから理解しておく。
- 医療従事者が居なくても、救命救急の講習を受けた者が複数居ることが望ましい。
(消防署などの講習を受けるよう年間で計画を立てておく)

仮に現場に分かるものが居なくても、スタッフは人工呼吸や心臓マッサージ、骨折が疑われる場合の処置を記したコピーなどを各自が持っているようにする。

○携帯が通じる場合は、取り乱さずに、消防署(救急車要請時)や医師の指示を受けながら応急処置を施す。

4. 個別プログラムの注意事項

(1) 樹木の伐採に伴う薪づくり

- ・ 樹木の伐採は必ず「その道のプロの指導者」の元に行く。
 - ・ 木が倒れる範囲の外で見学させる。
 - ・ ヘルメット着用、または枝や草木に引っかかりやすい服を避けるなどの指導をあらかじめしておく。
- * 本プログラムは基本的に行なわないこととします。

(2) 薪づくり／薪割り

- 当会での事故はありませんが、自然体験活動の中で最も多い、しかも深刻な事故につながる可能性のあるプログラムと聞いています。

- 以下の条件が全て整った時に限り催行します。(基本的にはやらない方針)

- ・ 薪割り参加対象を5年生以上とします。
- ・ 事前に講習会を開催し指導します。(指導を受けない子どもは本プログラムに参加出来ません)
- ・ 本来は素手でナタを持ち、片方の手に軍手をして行いますが、手を添えない割り方(両手でナタを持つ)で行います。(薪が飛んでケガをしないよう、周辺に小さな子どもを寄せない)
- ・ スタッフが使用前に道具の点検をします。
- ・ 必ずスタッフ/大人が付き添って行います。

(3) 炊事、包丁類、火気使用プログラム

- ・ 調理用具の事前講習、スタッフによる点検、付き添いを行います。
- ・ 火気の使用には常にスタッフ/大人が付いて注意を払います。
最も多いやけどは「熱湯を運ぶ鍋からこぼれた」「揚げ物の油がはねた」ということです。
- ・ 熱いものに触る、運ぶ時の為に軍手やミトンを使用します。
- ・ すぐに火が消せるよう消火用の水を用意します。
油用には防火シートのようなものを用意しておきます。
- ・ ナイロンのような燃えやすい服は避けるよう事前に指導しておきます。
- ・ 燃料の保管は必ずスタッフ/大人が行います。

(4) レクリエーションイベント

- ・安全な場所、十分なスペースの確保
- ・崖崩れ等の危険性の確認（下見はしていても直前の天候で変わっているかもしれない）
- ・大きな石ころやビンのかけら等ケガのもとになるものを拾う（手袋をして、皆で拾う）
- ・転倒しても安全な服装に配慮する。

安全ピン、バッチ、ペン（大人は爪楊枝などにも注意）

- ・ルールを確認（遊びにもルールは必要）徹底する。

特に鬼ごっこやかくれんぼの場合、一人で道に迷う、山道の下にすべり落ちるなどがあるので、範囲をしっかりと決めておく。（それでも子どもは遠くに行くので、レクリエーションの種類によっては呼び笛等を持たせるなどの工夫をする…事前案内）

(5) 川原での合宿・イベント

- ・過去の事故事例にあるように、雨が降った後の増水で中州に取り残される、浅い川が急流で深い川に急変して流されるなど天候（特に雨）の変化により環境が一変して災害に巻き込まれるケースがほとんどです。従って、天候、雨には十二分に配慮を行い「早すぎる」「慎重すぎる」位のタイミングでの中止や撤退を行います。